

「主の訓練」ヘブル 12：7-12 木村一充牧師

この朝お読み頂いたヘブライ人への手紙は、新約聖書の多くの手紙の中でただ一つ「挨拶の言葉」が抜け落ちている手紙です。ほかの手紙であれば、たとえば、「神のみ心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロから、エフェソにある聖なる者たちへ」という具合に、手紙の著者から受取人への挨拶の言葉が冒頭に記されるのが一般的です。ところが、このヘブライ人への手紙は、挨拶を抜きにして、いきなり「神は多くのしかたで先祖たちに語られたが…」とあって、まるで論文か説教のような書き出しになっています。このことから、この手紙の著者は、今日でいう大学教授、あるいは教会の教職者であって、かつてローマに住んだことがあり、今はローマを離れた地中海圏に住んでいる人物ではないか見られます。この教職者が、自分がローマを離れている間に、その弟子たちが信仰の道から外れることがないように、この手紙を書いた。その意味で、この手紙は説教であると同時に、激励、励ましの言葉でもあります。

この手紙を執筆するに至った事情については、以下のようなことが考えられます。手紙の受取人、すなわち読者である彼の弟子たちは、信仰に入った当初は「苦しい大きな戦いによく耐えた」（10・32）ののですが、その後、信仰生活を重ねる中で、一部の者に、「集会から離れ」（10・25）、「異なった教えに迷わされ」（13・9）、「みだらな生活に陥る」（13・4）者が出てきた。そのことを知った、かつてこの集会（教会）の指導者であった著者が、これからますます激しくなるであろうローマ帝国からの迫害を予期しつつ、この勧告の手紙を書き送ったのだ、と推定されています。私もこれまでいくつかの教会を経験してきましたが、伝道者にとって一番の喜びは、共に信仰生活の喜びや苦難、試練を分かち合った信仰の兄弟姉妹、仲間（弟子と呼ぶのはおこがましいので、仲間と呼ばせていただきます）が、今もなお教会につながり、それぞれの教会を、続けて支えておられることを聞くことです。かつて、共に信仰生活をおくった教会の信仰の友が、わざわざ遠くから礼拝に出席され、わたしに会いにきてくださることもありました。神戸から東京まで、あるいは山形から東京の練馬区まで足を運んでくださり、日曜礼拝をともにささげる恵みを分かち合うことができました。それは、この上ない喜びであります。このヘブライ人の手紙の著者も、かつてともに辛苦を共にして信仰生活を分かちあったローマの地に住む弟子たちが、み言葉に固く立ち、イエス・キリストを信じる信仰から離れることがないように願いつつ、この手紙を書いたのでありましょう。

さて、ヘブライ人への手紙は、最後の13章の終わりの挨拶を別にとすると、三つの主要な勧告（説教）から成り立っています。第一部は「神の言葉に聞き従おう」（1・1～4・13）、第二部は「信仰告白をしっかり守り礼拝に励もう」（4・14～10・31）、第三部は「イエスを仰ぎ見つつ忍耐をもって走り抜こう」（10・32～13・21）、と整理することができます。とくに第三部は信仰者の忍耐を説く勧めになっています。本日の聖書箇所は、この第三部にあたるところです。よく知られたこの12章からみ言葉を分かち合いたいと思います。

先ほどの朗読ではお読みいただきましたが、12章の1節から3節では、私たちの先達として、信仰の道を歩み、その生涯を全うした旧約聖書の偉人たちの名を思い起こしつつ、これらの人たちが信仰の証人として雲のように私たちを取り囲んでいると著者は述べます。その信仰の完成者として、イエス・キリストが登場されたというのです。ここで、著者はキリスト者の信仰の歩みをオリンピックのマラソンにたとえ、信仰の導き手であり、また完成者であるイエスを見つめながら、忍耐強く走ろうではないかと呼びかけます。イエスは十字架の死を耐え忍び、復活して天に挙げられたのち神の玉座の右にお座りになっていると、続けて書くのです。個人的な話で恐縮ですが、30数年前に家内と婚約式を行ったとき、私から妻に聖書を送りましたが、その後ろのページに、このヘブル書12:2のみ言葉を書きました。「信仰の導き手であり、その完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか」20代であった当時、まだ足は丈夫で、よくマラソンをしていたものですからこのみ言葉が真っ先に頭に浮かんだのです。この3節までのマラソンのたとえに続いて、本日の4節で「あなたがたはまだ、罪と戦って血を流すまで抵抗したことはありません」と書かれます。3節までのマラソンの

競争に加えて、4 節以下では信仰の戦いを拳闘、即ちボクシングにたとえています。「罪と戦って」と訳される「戦って」の文字通りの意味は「試合をして」となります。当時のボクシングで用いるグローブは、金具で裏打ちされていたため、試合の途中で流血することが少なくありませんでした。そのボクシングのように、血を流すほど、あなたがたは罪と試合をしていないではないか、とヘブル書はいうのです。この時代のローマでは、紀元 60 年代のネロ皇帝のキリスト者迫害に続いて、90 年代皇帝ドミティアヌスによる迫害が間近にせまっていました。戦いの相手は罪と言われますが、実際はキリスト者を取り巻くローマ帝国内でのさまざまな困難や試練、迫害の状況が著者の頭の中にはあります。しかし、イエスの苦難と忍耐に比べたら、あなたがたの苦難など小さいではないかというのです。先週の火曜日、船橋教会で「隠れキリシタン」についての研究に関する講演がありました。福岡県田川郡に住むクリスチャンの農民たちは、4000 人以上の人が踏み絵を踏まなかったといいます。しかし、田川藩はそれを黙認して幕府にウソの申告をしていたというのです。それは、クリスチャンの農民たちが、まじめに誠実に働き、年貢のコメをきちんと藩に納めていたからだそうです。大きな驚きでしたが、それ以上に驚いたことは、キリスト教に入信した武士が「自分はどのようなことがあるうとも、この信仰を捨てることはしない」との手紙を残していることです。この人たちの信仰があつて、いまの私たちがあります。厳しい迫害のなかでも信仰をもって生き抜いた江戸時代の信仰者（細川興秋）の信仰に心を動かされたことでした。

そうして、5 節以下で「主の訓練」のことが記されます。せっかくイエスは主なりと告白し、バプテスマを受けて神の子とされたのに、なぜ神さまはそうして、5 節以下で「主の訓練」のことが記されます。せっかくイエスは主なりと告白し、バプテスマを受けて神の子とされたのに、なぜ神さまはそうして、5 節以下で「主の訓練」のことが記されます。せっかくイエスは主なりと告白し、バプテスマを受けて神の子とされたのに、なぜ神さまはわたしたちの信仰生活の中で苦しいことや悲しいことを経験させるのか、何か罰が当たるような悪いことをしたせいだろうか、と、自責の念にかられることがあります。しかし、そうではないのです。あなたの苦しみは神の怒りのせいではありません。そうではなく、その困難や試練を経験させることで、あなたの信仰をさらに強くし、鍛えるためなのです。中学になって陸上部に入部しました。馬飛びやうさぎ跳び、何本もの短距離走、また 1500 メートルを走るなど、日々の練習はとてもきつく、入部した初めの頃は苦勞しました。ところが、数ヵ月たつと太ももに筋肉がついて、練習にも慣れてきたのです。風邪も引かず、持久力などの体力もついてきたのです。

信仰も同じだと聖書はいいます。神さまは、あなたをご自分の大切な子として取り扱っておられます。子どもが憎くて辛い思いをさせるものではありません。先ほども転入会の信仰告白をお聞きしましたが、そこでもお一人お一人に試練のときがあったことを思わされました。確かに、人生において苦しい事や辛いことを誰もが経験します。しかし、それは信仰者にとって、神さまによる訓練の出来事なのです。神さまは、その試練を通してあなたを鍛え、試練を乗り越えさせ、それによってあなたと神と関係をより強固なものとし、霊的に成長させてくださるのです。考えてみてください。人生において大変なときは確かにありますが、しかし、それはいつまでも続くものではありません。しばらく経つと、状況が変わる。長く続かないのです。病気や体の不調も時とともに癒されることも少なくありません。何よりも、神さまはどのような苦しみの中にあろうと、私たちの命までも取ろうとはされません。生かしてくださるのです。私たちにとって一番の平安、それは 10 節にあることばです。

「霊の父はわたしたちの益となるように、…わたしたちを鍛えられる」つまり、万事を益としてくださるのです。人生の試練や困難に出会っても、それを乗り越える力と勇気を持ちましょう。それ以上に、困難の中にも希望があることを信じましょう。神さまは、あなたを愛し、あなたをいつかは試練から救い出すお方です。そのことを信じて、希望を捨てることなく、二つの足でしっかりと立って、歩み出して行きたいと思うのであります。

お祈りいたします。